

2024年度311ゼミナール第6期

被災地実情班①

「石巻市雄勝町の被災と復興」

報告書



4年 船山雄太

1年 大久保奏亮

1年 高木那々実

1年 西美紗緒

1年 築場麻花

3年 五十嵐真子

1年 小山七海

1年 千葉奈々子

1年 根本蒼唯

3年 高橋輝良々

1年 佐藤菜々香

1年 千葉雄翔

1年 福岡加彩

目次

はじめに	01
------	----

2024年度活動計画	02
------------	----

雄勝の被災に向き合う	03
------------	----

- 小山七海さんの被災の体験・記録
- 小山七海さんのお母さんの犠牲
- 雄勝保育所・雄勝小学校の避難
- 雄勝の被災と向き合うことについての総括

雄勝の被災後の教育	04
-----------	----

- ・徳水博志先生の振り返りと取り組み

雄勝の現状と未来を考える	05
--------------	----

- 雄勝支所での聴き取り
- モリウミアスの取り組み
- ローズファクトリーガーデンの発信・挑戦
- 現状と未来についての総括

ゼミ生振り返り	06
---------	----

被災地実情班について

私たち被災地実情班は、東日本大震災の実情に向き合い、被災地と被災者の思いを共有することを目的に、現地に出向いて、被災経験者から聴き取りをすることを基本にしている。

2020年度第2期から、宮城県石巻市の牡鹿半島をフィールドにし、現地の方へのインタビュー調査や現地の視察を行ってきた。22年度までの活動で旧牡鹿町の小湊浜地区、鮎川地区の被災当時の状況や復興過程での出来事などを聴き取り、2冊の記録集として刊行した。

23年度には、石巻市門脇小学校1年で被災したメンバー高橋輝良々さんの学校避難経験を共有するため、門脇小学校遺構を訪ね、当時の校長鈴木洋子先生とともに避難路を歩き、学校避難の要点を学んだ、同時に、これまで視察できていなかった女川町も訪れ、当時女川一中の教員だった北上中校長の阿部一彦先生とともに町内を歩き、甚大な被災の様子を把握し、災害に対応する教員の覚悟について意見交換した。

いずれも活動報告書として詳細をまとめ、仙台防災未来フォーラムなどの機会に、成果を共有している。

活動のテーマ

「震災当時を追体験し、
具体的に知り、後世に伝える」

今期は視察調査地域を石巻市の旧雄勝町と仙台市荒浜地区に定めた。そのうち、この報告書では①として、雄勝地区の活動について整理する。

雄勝地区を視察調査の対象にしたのは、震災当時に旧雄勝町で保育園児として被災と避難を経験した小山七海さんが1年生としてグループに入り、その体験と教訓を共有し、記録に残すことにしたためだ。雄勝地区は被災規模が大きく、小山さんは市立病院に勤めていた母親を亡くしている。その犠牲に向き合い、被災を思い返しつつ、保育所や小学校の避難の教訓、さらには人口減少が続く地区の復興の行方についても関係者の聴き取りを進め、震災からの学びを深めることにした。

活動計画

○取材対象

- ・小山七海さん 震災時5歳 雄勝保育所園児
- ・徳水博志さん 震災当時雄勝小学校教諭
- ・阿部恵美子さん 震災当時雄勝保育所保育士
- ・石川儀幸さん、横山瑠美さん、秋山浩さん 石巻市雄勝総合支所職員
- ・安田健司さん モリウミナス

○行程

【8月26日】

- 11:30 旧雄勝病院慰霊碑・雄勝町慰霊碑公園を訪れる
- 13:00 徳水博志先生の案内で雄勝小避難の経緯と経路を現地確認する
- 14:30 雄勝花物語 雄勝ローズファクトリーガーデン
徳水先生から被災後の復興教育について講義と意見交換を行う
- 16:45 モリウミナスの活動について、安田さんから講話をいただく

【8月27日】

- 9:30 雄勝総合支所にて、石川儀幸地域復興課長らから被災と復興状況について説明、質疑応答
- 11:00 元雄勝保育所長の阿部恵美子さんから保育所避難について説明、質疑応答
- 13:00 雄勝花物語 雄勝ローズファクトリーガーデンにて、雄勝花物語の取り組みと雄勝の復興と未来について、徳水先生から説明、質疑応答
- 15:00 ガーデン作業のボランティア体験



今回の視察の前に、震災当時雄勝保育所年中で被災した小山七海さんに聴き取り調査を行った。自身の被災と避難の体験、お母さんの犠牲の話を聞くことができ、視察につながる有意義な時間になった。



(左から2番目が七海さん)

①小山七海さんの被災の体験・記録

○震災当日の行動

当時のことについては、はっきりとした記憶がない。思い出せる範囲では、地震が発生した時は、当時通っていた雄勝保育所で昼寝をしている時間であった。大きな揺れであったため、保育所の先生方がこれまでの避難訓練の通りに、雄勝小学校の近くにある神社へ避難することを決断し、他の子どもたちと一緒に避難を開始した。

神社に着いてからは、津波の到達状況から、さらに高台で、より海から離れたところを目指すこととなり、神社の裏山を登り、クリーンセンターまで歩いた。七海さんは、そのクリーンセンターで他の子どもたちと共に一夜を明かした。

○避難生活について

3月11日の一夜を明かすこととなったクリーンセンターに着く頃には、辺りは薄暗くなってきており、また、停電もしていたため、とても暗かった。ここには、七海さんの他にも、雄勝小学校の子どもたちや、地域の人たちも避難してきており、教室ぐらいの広さの広場にみんなで集まっていた。寒さを感じていた七海さんたちは、保育所の先生方の周りに集まるようにして暖を取っていた。七海さんは、当時雄勝町に住んでいた祖母とこのクリーンセンターで再会することができ、そこからは祖母も一夜を過ごした。

次の日には、小山さんと祖母は、保育所の先生方と子どもたちと共に、次の避難場所となる森林公園に向かうこととなった。そこでも、他の子どもたちや地域の人たちと一緒に過ごしていたが、震災から3日目のときに自衛隊のヘリコプターが到着し、さらに被害の少ない避難場所へ避難することとなった。

3つ目の避難先となったビッグバンでは、森林公園から避難してきた人たちの他にも、いろいろな地域の人たちがおり、それぞれの地域の人同士で集まって一緒に過ごした。ビッグバンではガスと水道が止まっていたが、電気を使うことができ、また、給水車や支援物資も来ていたため、水や食料を確保することができた。そのようにしてビッグバンで1週間くらい過ごした頃、当時石巻市内の中心部で仕事をしていた父が「七海さんがビッグバンにいる」という噂を聞きつけて訪ねてきたことから、震災後はじめて再会することができた。

父との再会後もしばらくはビッグバンで生活をしたが、その後、石巻市河南町にある父の知り合いの家で数か月を過ごした。

○メンバーからの質問

Q. クリーンセンターやビッグバンにいる時に、特に印象に残っていることは

A. クリーンセンターでは、保育所の先生が新聞紙やアルミホイルで私たちの体を温めてくれたことが印象深い。ビッグバンでは、支援物資が集まって来た後、自分も大変なはずなのに、おにぎりを作って配ってくれていた人たちがいて、すごいなと思っていた記憶がある。

Q. ビッグバンでは何をして過ごしたか

A. そこには同じ年頃の友達はいなく、自分よりも年上の小学生や中学生が多かった記憶があるが、60～70代くらいのおじいちゃんやおばあちゃんが子どもたちによく関わってくれて、一緒に遊んでいた。

Q. 励まされたり、元氣や勇氣をもらった言葉はあるか

A. 言葉などは覚えていないが、見ず知らずの人たちが、支援物資を配ってくれていた、一緒に遊んでくれていた、そのような協力して行動している人たちの姿に元氣をもらっていた。

Q. お母さんがいないことを意識したことは

A. 授業参観などの時に母の代わりに祖母が来ていたので、気にしていないように思いながらも、どこかで気にしないようにしていたのかもしれない。みんなとは少し違うのかなとは感じることもある。

Q. 小・中・高校時代に、震災について友達と話したことはあるか

A. 全然ない。ただ、高校生の時に、家族のことで悩んでいる友人がいて、その子を励ますために自分の被災経験やお母さんの話をしたことがある。その友人は、自分の話を聞いて驚いてはいたが、その後もこれまで通りに接してくれた。

Q. 高校で一人の友人に話すまで、自分の経験を話してこなかった理由は

A. あまり話す機会がなかったことと、「一人親」と聞くと周りの態度が変わってしまふとがあり、そのことが好きではなかったから話してこなかった。

Q. 未来の子どもたちに伝えていきたい教訓はあるか

A. 大人の言うことには従うべきだということ。自分が震災当日に避難させてもらって命を守ってもらったので、自分の経験からも、大人の言うことはよく聞いて行動することが大事だと思う。

Q. 地震の被災経験を教員になって子どもたちに伝えたいと思うか

A. 子どもたちの将来のためになるのなら、頑張って話していきたいと思う。

Q. 雄勝町の復興を見て思うことはあるか

A. 最近は、色々な施設が建ったり、地形が変わったり、震災前と大きく変わってしまったという印象と、雄勝町にいる人たちが少なくなってきた寂しいという思いがある。雄勝町に人を呼び込めるように頑張してほしい。

Q. 震災から雄勝にはどのくらいの頻度で行っているのか

A. 1年に1回は行っている。3月11日の追悼のために、雄勝病院があったところの慰霊碑に手を合わせに家族と一緒にいる。

Q. 震災について、家族や親せきと話すことはあったか

A. 親があまり話したがらないので、多くは話してこなかった。しかし、母と同年代のいとこと会う時は話することがある。当時を振り返ったり、「お母さんに背格好が似てきたよね」といった話をする。

②小山七海さんのお母さんの犠牲

本年度のゼミ活動が始まった頃、七海さんが、震災当時、市立雄勝病院に勤めていた自身のお母さんが津波の犠牲になってしまったことを話してくれた。そこで、私たちは、七海さんのお母さんが犠牲になった雄勝病院の視察を行った。

○雄勝病院について

震災前の雄勝病院は、病室から見える海の美しい景色が入院患者さんの気持ちを癒してくれる、とても人気のある病院であった。

東日本大震災の日、3階の病室には多くが寝たきりの40人の入院患者と、医師や看護師、市職員を含む事務職員など30人がいた。午後2時46分に震度6強の地震が発生し、直後に発令された大津波警報の予想高さは6メートルであった。そのため、病院内の職員たちは「3階以上には来ないだろう」と判断し、寝たきりで避難が不可能な入院患者をシートにのせ、職員4人で屋上へ避難させることになった。

しかし、何とか屋上に上がった頃には3階も浸水しており、屋上に到達するのは時間の問題であった。最終的に、この市立雄勝病院に到達した津波の高さは16メートルを超え、入院患者全員と医師、看護師、職員の24人の計64人の命を奪った。

七海さんのお母さんを含めた雄勝病院の職員は、医療人としての「助けたい」という強い責任感と高邁な使命感で、入院患者を守るために必死に努力した。



○現在の市立雄勝病院の跡地

現在の市立雄勝病院の跡地には、雄勝病院の犠牲者の慰霊碑と、少し登った高台に雄勝町の犠牲者の慰霊碑が立てられている。右のモニュメントは、この場所に到達した津波と同じ高さであり、実際に訪れてみても、ここまでの津波が襲ってきた、ということが信じ難かった。



○七海さんの振り返り

母が亡くなった病院について学んだり、当時の幼稚園の避難だったり、小学校の避難だったり、今まで知る機会がなかったが、様々な人から当時の雄勝について話してもらったおかげで、地元の震災による被害がどんなものだったのか、またどんな行動をとったり、とりとめたのかを知ることができ、震災についてぼんやりとしか覚えていなかったが、当時の状況を鮮明に知ることができてとてもよい経験になりました。また、震災と向き合う機会が今までなかったが、徳水先生のお話を聞いて辛い出来事と向き合うことの大切さを学んだ。

震災と向き合う経験から、私は私のように被災の経験をした子どもが災害に向き合えるようにサポートをしたいと思った。私は視察に行くまでは、災害と向き合うことはしんどいことなので、時間が必要だと考えていたが、災害をどうとらえるか言葉にしたり、絵にする活動を震災後間もなく行っていたことを知り、とても驚いた。辛い感情をみんなと共有することでだんだん向き合えるようになることを学び、私は地元を去り、なかなか言葉にしたり共有する機会がなかったため、子どもたちにはそのように言語化したり、意見を共有する機会を設けたいと思った。

視察を通して、私の被災経験を生かして今後の子どもたちへ災害について伝え、防災への意識を伝えたり、災害で辛い思いをした子どもの心を癒せるような先生になりたいという思いが強まったと感じた。

③雄勝保育所・雄勝小学校の避難

【阿部恵美子先生への聴き取り】

震災当時、七海さんが通っていた雄勝保育所の保育士として働いていた、阿部恵美子先生に震災当日の避難行動などについて聴き取りを行うことができた。

阿部先生は、雄勝保育所の保育士の中で唯一の雄勝町出身者として、子どもたちの命を守るために先頭に立って避難指示を行っていた。

以下に、阿部先生の聴き取りで分かった避難の様子を立ち寄り先ごとにまとめた。



○雄勝保育所の避難ルート



①雄勝保育所（地震発生時）

地震発生時は子どもたちのお昼寝の時間であり、子どもたち全員がひとつのホールで昼寝をしているところだった。そのような中で起きた地震は、かなり大きな揺れであったため、保育所のマニュアルや避難訓練で行ってきたように新山神社へ避難することを決断した。まだ揺れが続く中で、先生方は子どもたちにジャンパーを着せるなどし、避難までは10分もかからなかった。

②新山神社

保育所から神社までは、これまでの避難訓練から7～8分で到着したことが分かっている。ここには、次第に保育所の先生と子どもたちの他にも地域の人たちが避難をして来ており、何人かの子どもを保護者へ引き渡した。

この時、雄勝小学校の先生と子どもたちはまだ校庭に留まっており、「どうして小学校の子どもたちは避難してこないの？」という声があった。

そして、しばらく待機していた時、「あれ水じゃない!？」という、地域の人声が聞こえたため確認しに行くと、津波のようなものが見えた。マニュアルでは、神社までの避難しか想定されておらず、また、このとき他に避難して来ている人たちの中で神社から動き出す人はいなかったが、子どもたちの歩く速さのことを考え、誰よりも先に上を目指して裏山に避難することを決断した。

③新山神社の裏山

この保育所の避難行動に続いて、雄勝小学校や地域の人々も後を続き、先頭を歩く人や小学校の先生が保育所の子どものおんぶするなど、協力しながら登り続けた。険しい避難であったのにも関わらず、子どもたちは何一つ文句も言わず、1時間以上歩き続けた。

④クリーンセンター

ここに着いた頃には、外は薄暗くなっており、先に避難して来ていた大人たちが焚火などをしていた。そして、ここで一夜を明かすことになったが、泣く子どもは一人もいなかった。阿部先生自身も、「怖いはずなのに、”子どもたちを守らなければ”という責任感で動いていた」と語っている。

⑤森林公園

一夜明け、「森林公園に避難場所がある」という情報を聞き、森林公園を目指すことを決断した。クリーンセンターからはかなりの距離があったが、子どもたちを軽トラックの荷台に数回に分けて津波の浸水地域の手前まで乗せてもらい、そこからは歩き、そして、再び車が通れるところからは誰かの車の乗せてもらって辿り着いた。阿部先生は、津波が襲った地域を歩いていた時のことを「地獄絵の中にいるみたいだった」と表現している。

森林公園では、テントの中で一夜を過ごした。寒さで震える子どもたちに、ゴミ袋を被せるなどして暖を取った。そして、震災から3日目の日に、森林公園に自衛隊のヘリコプターが到着し、それぞれの避難場所に移動した。

【徳水博志先生への聴き取り】

震災当時、石巻市立雄勝小学校の4年生の担任として勤務していた徳水博志先生に雄勝小学校の避難行動について聴き取りを行うことができた。

雄勝小学校では、地震発生時すでに下校していた児童1人が犠牲になっているが、学校の集団避難に参加した児童と教員は全員無事であった。ただ、保育所の阿部先生の聴き取りでもわかったように、その避難は判断が遅れて、危機的だったという。

以下、現地で避難路を実際に案内してもらい、聴き取った内容を整理する。



○雄勝小学校の避難ルート



- ①雄勝小学校校庭（地震発生時）
- ②新山神社
- ③新山神社の裏山
- ④クリーンセンター

○地震発生時の様子

徳水先生が担任を務めていた4年生の30人のうち、26人は既に下校しており、教室に残っていたのは4人であった。

子どもたちは、二段階に亘って襲ってきた大地震に怯え、泣いていた。徳水先生は、「あんなに怯えた声と怯えた泣き声は初めて聞きました」と語っている。そして、徳水先生自身も、「俺の人生はここで終わりだ」「校舎が倒壊して死ぬのかな」と思うほど恐ろしい揺れだった。

この地震によって校舎は停電し、校内放送は使用できなくなっていた。そのため、各担任の判断で子どもたちを校庭まで避難させた。雄勝小学校では、災害が起きたときの役割を教員で決めていたのだが、震災当日はそれらを見捨て、それぞれの教員が臨機応変に行動していた。

○避難のきっかけ

校庭に避難して間もなく、当時避難場所と指定されていた雄勝小学校に、保護者や地域の人々が避難して来た。しかし、校舎のほとんどの窓が割れ、避難所として使うことが難しかったため、徳水先生が保護者や地域の人々の対応を行っていると、一人の保護者と小学校の管理職が揉めていることに気が付いた。管理職は、次の避難場所として体育館という、誤った指示を出していたのだ。本来のマニュアルでは、新山神社への避難が正しかったため、疑問に思った一人の保護者が訴えていたのである。

そのような中、徳水先生は、その保護者と目が合い、「先生なにやってんの！山でしょ！山に逃げないとだめでしょ！」と必死に訴えかけられた。はっとした徳水先生は、すぐに全校の子どもたちに神社へ避難することの指示を出し、先頭に立って神社まで走った。



○新山神社での様子

神社に避難すると、そこには既に班目（まだらめ）病院の看護師と患者さん、雄勝保育所の子どもたちが避難していた。

神社に着いてから5～8分後に津波第一波、そして、すぐに津波第二波が到達し、防潮堤を超えてきた。徳水先生は、津波が土埃をたてながら小学校に向かって来る様子を見ていた。体育館は屋根を曲げられ、校舎に向かって流されて、ゴーンと大きな音を立ててぶつかり、次第に神社も子どもたちが避難していた裏山の方に流されてきた。子どもたちに津波を見せないよう、「上にあげろ」と言って、さらに山を登るように伝えた。徳水先生は、山の下から声を出しながらも、一番後ろで町がどうなるかを見届けていた。当時の景色を思い出し、「海に完全に水没しました」「この町が海になりました」と語っている。

そして、子どもたちと一緒に山を登っていたとき、地元の消防団員の方から「この山を越えたところにあるクリーンセンターという清掃工場が避難所になっている」という情報をもらい、1時間以上かけてそのクリーンセンターを目指して歩き続けた。

○小学校避難についての徳水先生の振り返り

徳水先生は、当時の小学校の避難を振り返って、「私たちは子どもたちを校庭に避難させただけです」「教員だけでは、何もできませんでした」と語った。

神社に避難することができたのは保護者の声があったからであり、避難所まで子どもたちを避難させることができたのは地域の人々の助言があったからだ。学校の防災マニュアルは、地域との連携なしでは作ることができないものであり、それだけ地域の力は学校にとって大きいものである。

さらに、徳水先生は、「瞬時の判断が非常に重要だった」と語った。緊急事態の中では、規則に囚われずに、自分自身で判断して行動していかなければならない。教員が、その判断力を養うには、常に子どもを優先し、子どもの幸せは何か、子どもにとっての最善は何か、というような目の前の子どもについて考え続けながら判断することが大切なのである。普段の授業の中でも、子どもの予想外の発言に対して、教員がどのような発問で対応するのか、その瞬時の判断力は、子どもたちの学びの力だけでなく、災害時などの緊急事態でも生かされるものである。



○メンバーからの質問

Q. 山を登って避難する中でケガ人はいたのか

A. いたと思う。とても急な斜面であったし、当時は雪も降っていたため、滑って足を擦りむいたり、転んだ人もいたのではないかな。そのことを考えると、やはり素足での避難はとても危険なことだ。教員は、どのような状況でも対応することができるよう、普段から運動靴を履いて生活しておくべきだ。

Q. 管理職に対して、指示が間違っていると指摘する教員はいたのか

A. 指示が間違っていると感じている教員はいた。しかし、それを言うことのできる人がいなかった。私が子どもたちに指示を出すことができたのは、校長よりも自分が年上であり、対等にもものが言えたからというもの、理由の一つなのかもしれない。そう考えると、日ごろから、いかに教員同士が通し風通しよく意見を伝え合えるのが重要だ。責任者は、どのような状況でも正しい判断を下せるとは限らないのだから、教員、保護者、地域の全員でマニュアルを作り、対等に発言できる環境をつくっていかなければならない。

Q. なぜ管理職は間違った指示を出してしまったのか

A. 本当のことは本人に聞いてみないと分からないが、パニックになったのではないかな。あまりにも想定外すぎる状況の連続に、思考が停止してしまったのかもしれない。まじめな人ほど、規則や法律などに忠実に従ってしまうのかもしれないが、それが通用しないのが災害時などの緊急事態なのである。だからこそ、自分自身で考え、自分自身で行動することが非常に重要なのだ。

④雄勝の被災と向き合うことについての総括

私たちは小山七海さんの被災経験と、雄勝病院、雄勝保育所、雄勝小学校の当時の避難行動を知ること、命を守る立場にある責任と、震災発生時の瞬時の選択の一つひとつが命を守ることに繋がっているということを学ぶことができた。

まず初めに、雄勝病院の医師や看護師、事務職員の方々が、震災発生時のような突然の恐怖の中でも、命を守る立場にある責任を揺るがずに持ち続けることができたのは、日頃からその入院患者の命とその命ためにできることを大切にしてきたからだと考える。もしも、医師や看護師、事務職員の方々が自分の命を優先して行動していたのなら、助かった可能性が高い。しかし、それを選ばず、目の前の全ての命を諦めずに、最後まで必死に行動し続けた責任感の強さとその勇気を、私たちは決して忘れてはいけない。この出来事を知った上で教員を目指す私たちは、あの日、自分の命だけでなく、全員が助かることを信じて動いた人々がいたこと、そして、そこから残された教訓を、子どもたちに伝え繋ぐ責任を果たしていきたい。

次に、雄勝保育所では、避難行動に移すまでの判断の早さが保育所の子どもたちの命を守ったのだと考える。その判断の中には、日頃の避難訓練を活かしたものや、子どもたちの歩く速さなどを見通したものがあつた。新山神社へ避難してから、防災マニュアルでは想定されていなくとも、さらに上へ避難するという、命を守るための正しい判断を素早くできたのは、やはり避難訓練での予備知識やその地域の地理的特徴を知っていたからだと考える。また、目の前の子どもたちの現状を把握しておくことで、取るべき行動やそのタイミングを考えることができるのだと感じた。ただ周りに合わせて行動するのではなく、守るべき子どもたちに合わせて避難することの重要性を学ぶことができた。

最後に、雄勝小学校の避難からは、想定外の場面での対応力と教員や保護者、地域の人など全員で連携することの大切さを学ぶことができた。まず、対応力については、普段の学校生活から目の前にいる子どものために、自分は何ができるのかを常に考えていなければ身に付けることができない。その、できることを見つける力が、災害のような緊急時で、子どもを守るためにできることを見つける力になるのだと考える。

そして、当時雄勝小学校では管理職の間違った避難指示があつたが、その管理職は責任の大きさからパニックを起こしてしまったのかもしれない。もしも、誰もが対等に意見を言い合える関係性ができていたのなら、管理職などの役職に任せきりにならず、全員の力でより早い避難行動に移せていたのではないだろうか。

学校は、その地域の特色をよく知っている地域の人々の力、共により良い子どもの未来を願う保護者の力などを借りながら、子どもにとっての最善を尽くすことが重要だ。災害時でも、その最善の選択ができるよう、日頃から学校と地域での信頼関係づくりに力を入れるべきだろう。

04 雄勝の被災後の教育

徳水博志先生の振り返りと取り組み

徳水先生からは、被災後の雄勝小の学校再開、そして、その後のケアと復興教育、さらには教育における被災の位置づけ、意味付けについても1時間半にわたって詳しく話を聴いた。そこでは、被災と子ども、そして教育とは何なのかという根源的で重要なテーマが語られていた。以下、関連資料からの引用も含めて、その内容を整理する。

○学校再開

- ・ 2011年4月21日から、隣町の河北中学校の空教室で学校が再開された
- ・ 教科書、ノートは支給品で、教科書と板書のみの座学の授業が2年間継続された
- ・ 全家庭が町外に避難したために、子どもの数は震災前の108名から41名に激減した

○震災後の子ども達の様子

- ・ 低中学年…活動意欲なし、トイレに1人で行けない
- ・ 高学年…異常なテンションの高さ、際限なしのおしゃべりという異常行動
- ・ 数か月経っても、改善はなし
- ・ 雄勝に行けない子→心的外傷後ストレス障害(PTSD)の回避
- ・ 学習意欲の消沈
- ・ 授業は20分が限度、教科指導に見向きもしない
- ・ 学ぶ意味を喪失した子ども達、投げやり
- ・ 不登校3名 内陸部の転校先でも不登校(震災後4年間で全国1位)
- ・ 被災校はどの学級も授業不成立(学級崩壊)状態

○以上を受けた被災後の教育の方針

- ・ 〈子どもは地域の宝〉という子ども観への転換
- ・ 故郷を愛し、故郷を復興する社会参加の学力という学力観への転換
- ・ 地域の復興なくして、学校の再開なしという地域復興に貢献する学校経営観への転換
- ・ 地域復興を学び、社会参加する活動(間接的な心のケア)
- ・ 震災と向き合い、意味づける学び(心のケア)
- ・ 具体的な事例としては以下の取り組み
 - ・ 復興市での「南中ソーラン」披露
 - ・ 雄勝硯の工房で体験活動
 - ・ 仮設住宅に雄勝石の表札のプレゼント

○取り組みの成果

- ・「南中ソーラン」の披露は児童、保護者、地域住民に大きな成果を残した



〈引用〉徳水博志先生プレゼン資料より

・[実際に体験した子どもの感想文]

「南中ソーランをさいしょやるときは、めんどくせってゆってたけど、だんだんやる気が 出てきて、徳水先生にリーダーをやれとゆわれたときは、その1000倍のやる気が出ました。そして本番です。きんちょうしました。練習より100000倍がんばって、みんなであいさつをゆおうとしたら、最後にアンコールが出ました。アンコールがでたしゅんかなみだがちょっと出ました。そして終わりました。そして2回目をやりました。終わったあとまたアンコールが出ました。またなみだがちょっと出ました。みんなが見てくれてうれしかったです。ぼくは練習でまちがったところを本番でまちがいませんでした。みなさんのおかげ、徳水先生のおかげ、先生たちのおかげでまちがいませんでした。ありがとうございました。今度運動会や学習発表会でもやりたいです。みなさんありがとうございました」(抜粋)

○復興まちづくりプラン

- ・子どもたちに雄勝の復興について、プランを考えて発表する機会を設けた
- ・卒業制作でジオラマをつくり、披露した
- ・児童からは次のような振り返り

「私たちは、卒業制作として、「未来の雄勝の町」を紙粘土で立体模型にすることにしました。発砲スチロールの上に紙粘土を重ねて、山などを作り、アクリル絵の具で色をぬりました。道を作り、海を作り、本当の雄勝ができていくようでした。その作業はけっこう楽しかったです。私たちは、もし、震災がなかったら、このような貴重な体験ができなかったと思います。だからと言って震災があってよかったというわけではありません。でも、この経験は、とても貴重なものだと思います。それに、今回の活動で、故郷である雄勝がどれだけ大切かが身に染みてわかった気がします。これからは雄勝を大切にしたいと思います。私の一番心に残った「未来の雄勝作り」。とっても楽しかったです」

・保護者からは次のような感想

「涙がでました。未来が見えます。子ども達が雄勝のことを考えてくれるなんて、うれしくなりました。転校しなくてよかったです」

・発表を聞いた雄勝総合支所長の感想

「皆さんの発表を聞いていて胸に熱いものがこみ上げてきました。皆さんの意見は大変参考になりました。光を見るようでした。これからの話合いに生かしていきたい」

○徳水先生の意義づけ

- ・南中ソーランが大人を励ました、子どもの自尊心を高め、前を向く力を育てている
- ・教師側から子ども達に復興に参加しよう！支援活動を行おう！とは一言も言っていないが、活動を通して子ども自身が前を向く力を得た、結果として心のケアになっている
- ・教師にとっては、子ども達が受け身で支援されるよりも、支援する側に回った方が自分が癒されるという教育的価値の発見につながった
- ・復興まちづくりプランは親に希望を与えてくれた
- ・子どもの支援活動《社会参加》で、住民が励まされた
- ・住民に感謝されることで、子どもたちは自己有用感と自尊感情を高めた
- ・それは。子どもと住民との相互に心の交流(心の癒し・ケア)につながった

○その後、2年目以降の児童・学校の様子

- ・新たな荒れが起きた
- ・授業は20分限度、学習嫌い、集中力と意欲の低下、投げやり、目標の喪失
- ・「殺すぞ!死ね!消えろ!」暴言を吐く子、トラブル、いじめの顕在化
- ・異常なテンションの高さ イライラ、しゃべり続ける、奇声、はしゃぐ
- ・授業中の私語や休憩中のしゃべりを抑えられない(不安や恐怖)、異常な覚醒興奮状態
- ・2年目に心的外傷後ストレス障害(PTSD)の疑いの子も存在した
- ・震災後の生活環境の激変(避難所。仮設、地域の喪失感等)も影響した
- ・これまで教育実践が通用しない事態に直面した
- ・徳水先生の体力と気力は限界を超え、持病が悪化し、1学級終了と同時に1か月入院した
- ・病室で先生は次のように考察した
「子どもの問題行動は、学習以前に身体的・生理的に授業を受け付けられないという状態。被災児が起こす問題行動は、学習指導方法の改善の問題ではない。それ以前の別問題としてとらえる必要がある」
- ・子ども理解の転換の必要性に気づく

○子ども理解の転換

- ・目の前の子どもは、千年に1回の大災害を体験した子どもである
- ・子どもも教師も親もかつて経験したことがない「未体験のゾーン」に入っていた
- ・自分が住む世界で起こったことを整理し、解釈することができずに、パニック状態
- ・心に抱える問題を言葉にできずに、対象化できず、表現できず、ただ不安感やイライラ
- ・はしゃぎ、暴言を吐くことで、逃れようとしているのではないかと理解する
- ・「震災がらみの病理を発症した子どもたち」という子ども理解に転換
- ・病理を癒すケア的教育実践を行って、子どもが心に抱える問題が解決されるならば、学習意欲が回復し、学力や生徒指導上の問題が解決できるのではないかと
- ・教師としては、「震災で私の人生は狂った」と考える子にはなってほしくない
- ・心の不安・叫び・恐怖・悲嘆の感情を受け止め、表現させ、意味づけさせる必要がある

○被災した子どもが求めている学び・震災体験の対象化と意義づけ

- ・子どもが抱えるトラウマやグリーフを解決してくれて、前を向くことに結び付く学び
- ・震災を人生の一部として引き受けて、人生の物語を新しく描き直すような学び
- ・震災をただの不幸な体験にしない、プラスに転化する学び
- ・イメージとしては、「震災体験の対象化と意味づける学び」が必要
- ・実践例はなく、手探りでやるしかなかったが、徳水先生自身の体験がヒント
- ・避難所で住民から感謝され、感謝されることで力をいただき、命が回復する体験を得た
- ・地域とのつながりを再構築することで癒された。失った関係性の再構築が心のケアに有効
- ・「震災と向き合い、意味づける学び」を立案
- ・総合学習で「震災体験を記録しよう」に取り組む
- ・現実を受け入れて心を整理し、震災と折り合いをつけて、前を向く意思と希望を育む
- ・ねらい:震災体験の「対象化」と「意味づけの力」を育てる

○具体的な実践①【俳句の授業】2012年9月

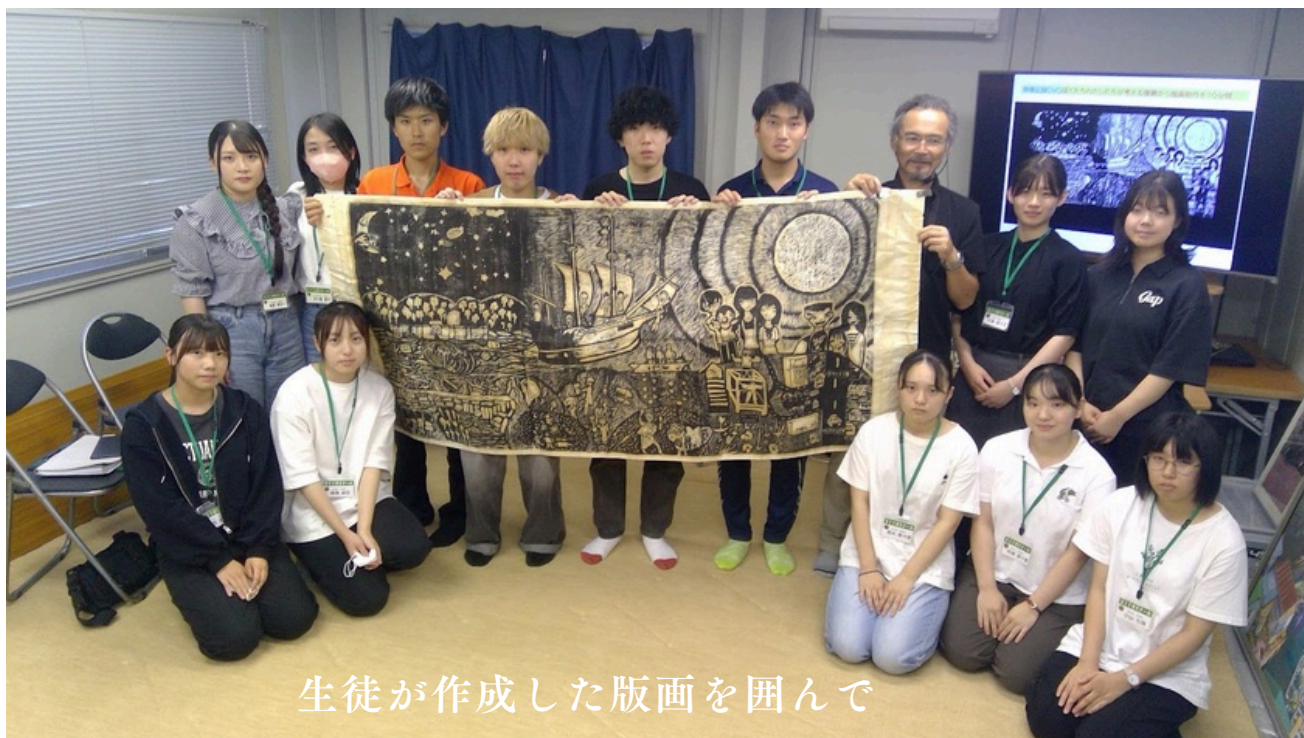
- ・国語の時間に俳句で震災を詠む授業に取り組んだ
- ・「大震災がみんなからうばえなかったもの、大震災がみんなからうばったもの」

【児童の五七五】

- ・わすれないみんなのやさしさどんな日も
 - ・ありがとう今までの豆腐おいしかったよ
 - ・大津波一生来るな雄勝にな
 - ・家族からうばったものをとりもとそう
 - ・友達を一度でも守ってあげたいぜったいに
 - ・震災がうばえないものはかぞくだよ
 - ・まけられないしんさいなんかぜったいに
 - ・もうくんな津波や地震もううんざり
 - ・わすれないあの日起きたしんさいを
-
- ・大震災が奪えなかったもの(雄勝の土地、家族、人とのつながり、親子の愛、命、仲間、前向きな心)を確認して、自分自身を支えている土台が残っていることを再認識していった
 - ・震災をただのマイナス体験で終わらせることなく、意味づけをしてプラス体験にすることで、今後の人生を歩む糧にすることができる

○具体的な実践②【絵本づくりと版画制作】2019年11月から2020年3月

- ・震災当日からの歩みを時系列で、絵と文で表現する活動
- ・どの子も夢中になって書き始める。
- ・津波の当日の出来事や避難所での記憶を「時系列」で確かめ合いながら書き進めた
- ・学級集団の力を借りて震災の記憶とゆるやかに向き合うことになる



生徒が作成した版画を囲んで

○徳水先生の振り返り

「震災の記憶を語り合い、表現することによって、恐怖の記憶や辛い体験とゆるやかに向き合うことになり、記憶や体験の対象化が促進されていったと理解できる」

「作文や版画制作を通して、子どもたちは辛い記憶と向き合い、震災を人生の一部として引き受けて、心を整理し過去から未来につながる「物語」を描くことで前を向こうとしている。ナラティブセラピーの要素がある表現活動だった」

人とつながり、希望を紡ぐ ―徳水先生の13年間の歩み―

徳水先生が被災後の教育を語る際に、何度も強調していたのが「人とつながり、希望を紡ぐ」という言葉だった。13年間の歩みのなかで、徳水先生が得た視点を最後に整理する。



1つ目「人とつながることで足元から希望を生み出す」

ガーデンファクトリーのはじまりは、利枝さんが植えた2輪の花だった。そこから、人と人とのつながりの連続により、ガーデン事業は拡大し、現在、癒しの空間を提供している。

人が一歩踏み出すと、誰かがそこにつながってくれる、ということを徳水先生は目の当たりにした。一步の行動を縦糸とし、そこにつながってくれる人を横糸としたとき、縦糸と横糸で小さな希望から大きな希望を足元から紡いでいくのだ。

2つ目「被災者が受け身から転換して、復興の主体になるときに癒される」

被災者は、様々なところから支援を受ける。その支援を受け身で受け続けていると、次第に支援慣れをしてしまう。支援を受けるだけではなく利枝さんのように弔いの気持ちからお花を植えたり、子どもを失くした親が語り部活動を行ったりするなど、被災者自らが行動を起こし、新たな関係性を生み出したり再構築したりする。そうすることで、生きる力が湧いてくる。また、震災の対象化と意味付けが行われることによって、意味を与えられた「つらさ」はプラスになる。

3つ目「他者を幸福にすることで自身も幸福になる」

ガーデンファクトリーの事業がここまで大きくなるまでに、年間1000人のボランティアの方々が協力や多額の寄付金の支援を受けた。この背後には無償の愛がある、と徳水先生は話す。そのため、無償の愛を無償で返したい、という思いが強い徳水先生は、ファクトリーガーデンの無料開放を行っている。他者へ癒しの空間を提供することで、自分自身が幸福になるという体験を実際、13年間してきた。お金で換算できない価値をつくり出している。人間というのは、「他者の役に立って、他者を喜ばせることで、自分が幸福になるように実は作られている存在」だと思っている、と説く御前先生は話す。私、教員になったのは、子どもの幸せが自分の幸せにするためです。子どもたちが成長していく姿を見ることが楽しいし、嬉しいし、そこに喜びを感じるのが生きがいがある。

05 雄勝の現状と未来を考える

総合支所での聴き取り

雄勝町の震災による被害状況や復興の実現に向けての取り組みについて、石巻市雄勝総合支所地域振興課の課長石川儀幸さん、職員横山瑠美さん、秋山浩さんに聴き取りを行った。以下、配布された資料の一部を掲載し、概要の紹介とする。



1. 被害状況 (1)被害概要

地震概要(気象庁発表)

○発生日時 平成23年3月11日(金) 14時46分
○震央地名 牡鹿半島の東南東約130kmの三陸沖
(北緯38度06.2分/東経142度51.6分)

○深さ 24km ○規模 M9.0 ○震度 震度6強(石巻市)

津波概要

○津波の高さ 最大高さ T.P(東日本平均海面) 16.6m(鮎川:気象庁発表)
沿岸波状による最大高さ
○浸水面積 73km²(H23.4.18国土地理院発表)
※石巻市内の13.2%(平野部の約30%)が浸水

雄勝地域の被害の状況(H23.5末 宮城県及び宮城県発表) []は石巻市

○人的被害 死者数 173人 [3,277人] (雄勝死156人、関連死17人)
行方不明者 70人 [417人]
○建物被害 全壊 1,304棟 [20,044棟]
半壊 96棟 [13,049棟]
一部損壊 67棟 [23,615棟]
合計 1,467棟 [56,708棟]
○地盤沈下 最大沈降 -120cm(牡鹿地区鮎川)

雄勝地域の避難状況 []は石巻市

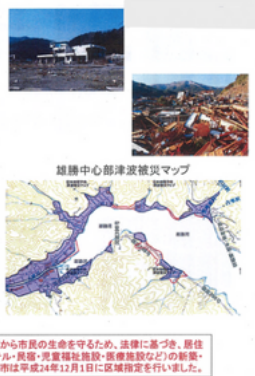
○最大避難者数 2,548人 [50,758人] (H23年3月17日時点)
○最大避難所数 23箇所 [259箇所]
※避難所は平成23年10月1日、避難所は同年12月1日をもってすべて閉鎖



1. 被害状況 (1)被害概要

浸水区域(雄勝)

津波による浸水深の状況



3. 復興の実現に向けて (1)石巻市震災復興基本計画

概要

平成23年12月に、復興の基本的な考え方や今後の復興に関する施策の展開、地区別の整備方針等今後10年間の復興に向けた道標として策定しました。

基本的な考え方

基本理念1:災害に強いまちづくり
基本理念2:産業・経済の再生
基本理念3:絆と協働の共創社会づくり
基本理念4:自然と共生のまちづくり

施策大綱

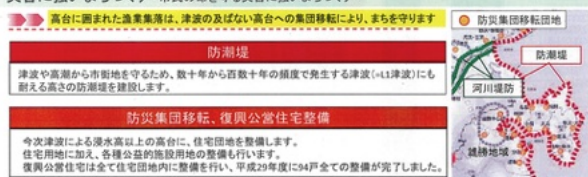
施策大綱1:防災・減災
施策大綱2:防災・減災
施策大綱3:防災・減災
施策大綱4:防災・減災

計画期間

24年度 復興期
25年度 復興期
26年度 復興期
27年度 復興期
28年度 復興期
29年度 復興期
30年度 復興期
31年度 復興期
32年度 復興期

3. 復興の実現に向けて (2)復興まちづくりの姿

災害に強いまちづくり～市民の命を守る災害に強いまちづくり～



産業・経済の再生～地域資源を活かした産業振興基盤づくり～

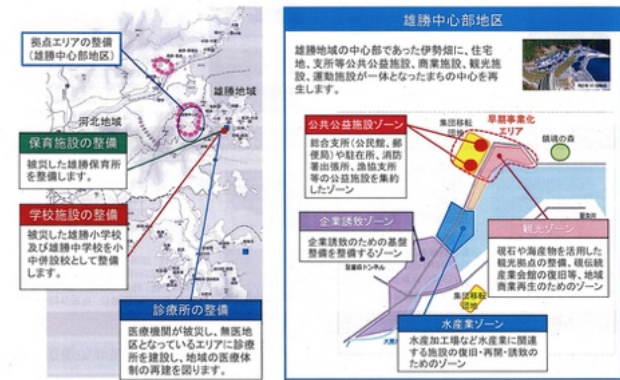


3. 復興の実現に向けて (2)復興まちづくりの姿

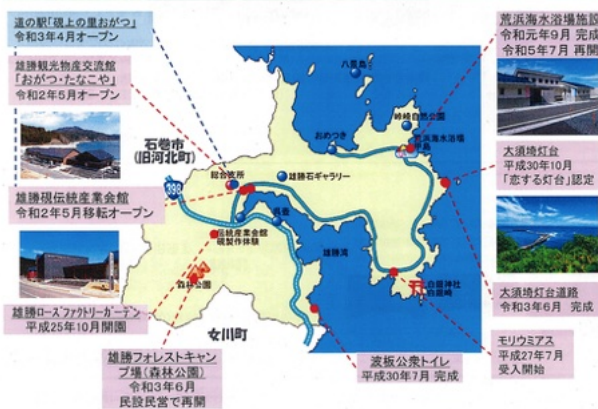
絆と協働の共創社会づくり～生活を豊かにするための施策～



拠点エリア等の整備



主な観光施設の被災・復旧状況



■質疑応答を通して聴き取った内容について以下、整理する。



○雄勝町の総合防災訓練

雄勝町では、毎年11月の第1週に行っている。昨年(2023年)は、石巻市立雄勝小・中学校に児童生徒、保護者、そして地域の人が集まり、防災テントの建て方や受付の練習など避難所として活用できるような訓練を行った。参加した人からは「役に立った」という声が多く、とても好評であった。しかし、参加率については、それほど多くの人が参加しているわけではなかったため、これがひとつの課題である。

○復興に向けての取り組みに対する住民の声

高い防潮堤や山を削って新しい中心地を作るなどの計画に対しては、比較的批判的な意見が少なかった。震災が発生した後、それぞれの地区や自治体で復興計画を立てていたのだが、最終的に雄勝町として復興の方針をまとめるときには、様々な意見が出ていたため取りまとめが難しかったことがあった。

また、雄勝町では、復興に向けて”津波の及ばない高台への住居集団移転を図り、安全安心を確保する”という取り組みを行っている。この取り組みでは、高台開発を実行する前に、場所の希望や世帯数などの住民の意見を調査してから行ったため、批判的な意見が少なかった。しかし、高台開発が始まった後に移転の希望を出した住民の意見は、土地の広さなどの問題から確保が難しい状況になっている。それでも、住民の声を重視しながら復興に向けた取り組みを行っていることが、批判的な声が少ない理由なのではないだろうか。

○若者の移住・定住

石巻市としての移住・定住の支援体制の仕組みがあるが、雄勝に特化したものではない。そのため、空き家など住民との情報を密にすることで、実際にUターンで戻って来た若者がいる。住民の中でも、若者の移住・定住を増やすための魅力を配信していきたいという意見があるため、まずは子育て世代に焦点化したものを考えている。

○雄勝町の住民で行うイベント

震災をきっかけに人が集まる機会として、大須小・中学校の運動会に地域の人参加する種目がある。もともと、震災前は”町民運動会”として行っていたものを復活させたものだ。現在は、コロナウィルスの影響により中止になっている。

その他にも、住民が主体となって芸能祭や祭りなどを開催し、それらの文化の担い手を外部の人たちにも協力を呼び掛けている。

○現在の雄勝町の活力

地域によっても復興や再生の進みは違うが、雄勝町は特に進みが遅かった。”雄勝町に戻りたいけれど待つことができない”という人の意見もあったため、実際に戻ってくる人や企業が少なく、当初復興計画で想定していた雄勝町の活力には及んでいない。他の地域と比べると、店の少なさなどから住みやすさなどで劣ってしまう部分もあるのではないか。そのため、観光分野の発展を目指し、外部への発信を充実させる必要がある。

そして、秋山さんは「現在の雄勝町は、我慢の時期だ」と語る。雄勝町の強みである水産業などが地球温暖化の影響により、ホタテ、ホヤ、カキ、全ての食種が苦しい状況に立っている。養殖の入れる種類を変更するなどの工夫をして対策を考え、影響を和らげる努力をしているが、自然を相手にすることは難しい。

そこで、今年からモリウミアスとは別にモリウミアスファームという一般社団法人が誕生してフード畑を作ったり、ローズファクトリーガーデンのレストラン構造だったりの取り組みが始まった。雄勝地域の玄関口となる場所の発展から雄勝地区全体の活力へつなげていきたいと考えている。”我慢の時期”ではあるが、その中でできる雄勝町の復興と再生、外部の方々との交流などから、希望の芽は確実に存在している。



モリウミウス

私たちは、視察1日目の宿泊施設として、雄勝地区桑浜にある「モリウミウス」を利用させていただきました。震災後に廃校を活用した研修施設として東京の実業家らが開所し、国内外から利用者が絶えないこの施設には、人口減が続く雄勝地区の未来を考える大切な視点がある。以下、モリウミアスの概要と職員の思いを整理する。



○モリウミウスとは

モリウミウスは、子どもたちの好奇心と探究心を刺激する複合体験施設。

雄勝の豊かな森と海と里で、自然とともに生きる暮らしを体験することができる様々なプログラムがある。

○モリウミアスの名前の由来

モリウミウス（MORIUMIUS）には、「森と海と明日へ」という意味に加え、

”US”には、「私たち」みんなで持続可能で豊かな社会を創っていくという想いが込められている。

○モリウミアスのはじまり

モリウミアスのはじまりは、震災直後にさかのぼる。避難所への炊き出しやスイーツを届ける等の活動をしていた人たちが、その後も小中学生への教育支援を続ける一方で、旧桑浜小学校を子どもたちの体験施設に回収する「雄勝学校再生プロジェクト」を2013年にスタートさせた。

モリウミウスがある雄勝町は、東日本大震災によって町の8割が壊滅されたが、地域の復興への思いから、高台に残る廃校（旧桑浜小学校）が新たな学びの場として生まれ変わった。

現在の形になるまでに、約2年半の月日がかかった。立ち上げには、多くの企業・財団の支援を受け、約5,000人のボランティアが協力を得て、2015年8月にオープンした。

モリウミアスの立ち上げの中心となったのは、現在のモリウミアスの代表である油井元太郎さんである。以下はHPからの抜粋。

〔油井 元太郎 さん〕

1975年生まれ。幼少からアメリカで過ごし、アメリカの大学を卒業後、ニューヨークにて音楽やテレビの仕事を経て、2004年に帰国。9月に操業メンバーとしてキッザニアを日本に導入する会社を設立。2006・09年に東京と甲子園に施設をオープン、年間約80万人に体験を通じた学びの機会をつくる。2013年より宮城県石巻市雄勝町に残る築94年の廃校を再生するプロジェクトに着手し、自然の循環や土地の文化、多様性を体感する学び場「MORIUMIUS」として2015年にオープンした。

○モリウミアスのコンセプト

1. サステナブル

食べきれずに残してしまった食べ物を施設の庭で飼育しているワトリのエサにしたり、調理の過程で出てくる野菜のヘタなどを活用してもう一度野菜を作ったりしている。一般的には廃棄してしまうものを、他の形で利活用することで、“全ての命が循環する仕組み”を作り上げている。



2. ローカル

豊かな山と海に恵まれ、自然と伝統が今なお色濃く残る雄勝町。

東日本大震災後もこの地に残り、力強く生き続ける人たちの生き様や、田舎、漁村ならではの豊かな暮らしと地域住民、人とのつながりに触れていく。



3. ダイバーシティ

モリウミアスのプログラムに参加する子どもの中には、外国から来る子も多い。さらに、アーティストやプロのシェフなど普段の生活のなかでは、なかなか出会うことのできないような方々が、子どもたちのために、無償で協力してくださっている。

このように普段交わらない相手と交流することができたりその交流の中で、今までしたことのない経験を経験することができ、新しい世界に触れたり、今まで見たことのない景色を味わったりすることができる。

○現状について

・利用者の推移について

オープンしてから1,2年目は、あまり利用者がなく、5週間あるプログラムの1～3週目が埋まるくらいの人数だったという。

3年目くらいからは、大体14～15人くらい、今は20数名の方が毎週（プログラムの5週）利用している。基本的に、右肩上がりの推移ではあるが、現在の利用状況が、体制的に限界であるようだ。留学生の参加については今年度で3年目、まだ毎年3人程度の参加で「さらに増やしていきたい」という。

・漁村留学について

留学の条件が2つある。「子どもの意思があること」と「親の理解があること」だ。留学をしに来る子どもは、それぞれ異なる理由を持っている。モリウミアスの環境が好きで毎年のように来ている子もいれば、地元の関係性にあまり満足ができず、環境の変化を求めて留学を決めた子、自分自身が変わりたいという思いを抱いてきた子など。



〈引用〉モリウミアス ホームページより

・雄勝の居住割合

東京都が9割。神奈川県や千葉県も多い。仙台・海外がそれぞれ0.5割。

また、夏の時期になると、夏休みの期間に日本に帰ってくる子どもも多く、東南アジア・中東・アメリカの西海岸などに住んでいる人が多く利用しにくる。

・夏以外の活動について

夏休みでない期間は、基本的に、週末に見にきてもらうということを大体月1～2回（毎月）行なっている。

1～2月は、あまりニーズがないため、スタッフが外に出て研修に行くための期間としていたこともあった。今年度は、新しいプログラムを考案している。

モリウミナス 安田健司さんの思い

宿泊するの夜に、モリウミナスの立ち上げ人の1人であり、現在も運営に関わっている安田健司さんからお話を伺った。

○安田健司さんについて

千葉県出身 36歳

東日本大震災当時は、大学3～4年生で、NGOなどで働きたいと考えていた。

ボランティアで偶然、雄勝に来て、2012年には、学習支援などを行っていた。

モリウミナスの最高責任者らと知り合い、モリウミナスを立ち上げた。プライベートでも海に行ったり釣りをしたりすることがあり、2014年に雄勝に移住し、定住している。



○モリウミナスの存在意義をどう考えるか

「子どもたちにとって、雄勝の町、この町に残っている自然がすごく学びの価値がある。それに価値を感じているからこそ、十年間ずっと子どもたちが来てくれて、保護者も送り出してくれている。子どもの学びを一緒に作ろうとか、今ここで行っている循環する暮らしを作ろう、というような形で来てくれる方がたくさんいることによって、その中で住民参加も実現。特に子どもたちが来ると、地域の方々がとても喜び、一緒に交流したりする。ここにモリウミナスがあることで、子どもたちにとってだけではなく、地域の人たちにとっても刺激となっていると思う」

○雄勝の特徴とモリウミナスの役目

モリウミナス付近の地域には、限界集落と呼ばれる漁村が多く残っている。中心部よりも津波の被害を受けていないが、高齢化が進んでいる。しかし、「田舎の暮らしや先人の知恵、お祭りなど、この土地で生きることによって豊かさを感じられる」と、安田さんは話す。この豊かさをどのように残していくのか。モリウミナスは被災地の価値を共有し、全国や世界に向けて発信の役目を負っていると感じた。

「ここにモリウミナスがあるからこそ、子どもたちが生き生きと帰ってくるということもある。そういう場所を残したい。今の生活や暮らしに課題を抱えている子どもたちが、地元とは別に、根を張る場所として、安心感があるような場所になっていけたらと思い、今は子どもたちを受け入れている」とも語ってくれた。広い意味での「教育」を支える拠点とも位置付けられるかもしれない。

モリウミアスについての総括

今回、モリウミアスの立ち上げ人の一人である安田健司さんから、モリウミアスが現在の形になるまでの道のりや、これまでに行ってきた様々な取り組み、今後の展望についてのお話を伺った。安田さんのお話を聞くなかで、「人とのつながり」について考えることができた。

モリウミアスが現在の形になるまでには、たくさんの人の協力があった。また、現在、モリウミアスを支えてくれている後援会社については、現在のモリウミアス代表である油井元太郎さんと、代表理事を務める立花貴さんがサラリーマンだった頃の当時のコネクションがほとんどだというお話をしてくださった。

また、これまでに行ってきた取り組み、現在進めている取り組みなどについて、プロジェクトに参加する子どもは、何かしらの事情を抱えている場合が多い。そのような子どもたち、その保護者が、「ここなら自分が変われそう」「ここなら自分らしくいられそう」など、前向きな気持ちをもてるような場所。それがモリウミアスである。

安田さんに、「例えば今、地元の方に居場所がないと感じている子どもがいた場合、モリウミアスは、その子にとってどのような場所になってほしいと考えているのか。」ということ質問させていただいた。安田さんは、「ここがその子にとっての居場所にならなくても良い。一度ここにきて休んで、その子にとっての居場所が、ここ以外の場所でも、見つけられたらそれでいい。一時的な避難場所のような立ち位置で構わない」というようなことを話してくださった。

そして、人から離れた分、自然と触れ合うことが大事になるのではないかということ、実際にモリウミアスに宿泊し、感じることもできたように思う。「自然と触れ合い、自然を大切にする」当たり前のことのようにも感じられるが、現代社会で実践することはなかなか難しいのではないだろうか。それを実践できたとき、子どものみならず、大人になった私たちも、より明るい未来へと進んでいくことができるはずであると感じた。

モリウミアスには、日本各地のみならず、世界からも足を運んでくる人々がいる。震災後から人口流出が止まらない雄勝町は、人口が震災前の4分の1にまで減少した。この先、定住人口が伸びるとも考えにくい状況ではある。そのような雄勝町に、モリウミアスがあることによって、雄勝町を訪れる人々は増加傾向にある。雄勝町に定住する人口を増やすことは難しくても、雄勝町の関係人口や交流人口が増加すること。これも、災害被災地の復興と言えるのではないだろうか。

モリウミアスの取り組み、モリウミアスが作り出している環境は、今を生きる人々、そして、これからの時代を生きていく人々にとって、とても重要な役割を果たし、これまでよりも、より一層求められていくのではないかと思う。

ローズファクトリーガーデンの発信・挑戦

徳水先生は教員退職後の活動拠点として味噌作地区に「ローズファクトリーガーデン」を構え、復興の未来を多くの人たちとの交流によって描こうとしている。

その活動が目指すところは何か。HPの記述とともに聴き取りの内容を整理する



○一般社団法人「雄勝花物語」のはじまり

拠点としている、ローズファクトリーガーデンがある場所は、徳水先生の奥さんである徳水利枝さんの実家があった場所である。

震災で母、叔母、いとこの3人を亡くした利枝さんが供養のために、母が大好きだったホオズキの花を植えたことが物語の始まりという。花を植え始めた利枝さんには、母を助けることができなかったという”自責の念”、ふるさとを失った”喪失感”、コミュニティを再生したいという思いがあった。徳水先生は、「妻の”亡くなった人、亡くなったもの”をつなげる場を作りたい」という思いは、すなわち、”地域を再生したい”ということでしょうね」と語る。

そして、2011年の9月に被災地緑化支援に来ていた千葉大学園芸学部の方々と花壇造りが始まった。その後も、”自宅を失った雄勝の方々のために故郷とつながる場として花畑をつくりたい”という思いが地元住民やたくさんのボランティアの方々の心に紡がれていき、地元住民と1000人以上のボランティアの協力のもと、次から次へとガーデン造成が進んでいった。

○事業内容

「雄勝花物語」は、利枝さんの”被災者が失った人や失ったものをつなげる場をつくりたい”という思いと、徳水先生の”雄勝の子どもたちに働く場所を提供し、雇用を生み出して600年の歴史ある地域を残したい”という目標を実現するべく、財政基盤の確立のため、2014年3月に一般社団法人「雄勝花物語」として法人化した。

①【被災地支援活動】

雄勝ローズファクトリーガーデンを拠点に、被災地の緑化とガーデンの無料開放、無料コンサートなどを行う。

②【教育支援活動】

被災地で支援を行いたい企業や団体、学校などにボランティア活動の場を提供する。また、津波防災教育・語り部、被災時の心のケアなどについて、被災体験と地域づくり体験に基づいたプログラムを提供する。

③【事業】

花を使った体験教室、花苗の販売、ハーブ等と「北限のオリーブ」の栽培によって高齢者や若者の雇用を目指す。

④【まちづくり活動】

行政や他の団体と連携しながら、住民主体の持続可能なまちづくりを行う。

○目指していること

- ・一人一人の思いを紡いで”花と緑の力で”という合言葉のもとで震災からの復興を進め、町内に利益が落ちる地産地消の「地域内経済循環」を構築し、人口が減少した雄勝町を持続可能な新しい町につくり変えること
- ・若者が雄勝に魅力を感じ、震災復興の後継者として定住すること
- ・雄勝の良さを日本にとどまらず世界にも発信するような、雄勝地域と世界を結び付けるグローバルな発想力と行動力を持つ若者を育てること
- ・若者を持続可能な地域の再生を担う主人公として育てること
- ・雄勝の子どもたちが故郷を愛し、復興を継承する未来の主人公として育つこと
- ・600年の歴史と伝統文化を継承してきた祖先の意志を次の世代に引き継ぐこと
- ・震災復興と過疎からの再生という二重の課題を克服し、日本の地域再生のモデルを創ること

○被災地・過疎地域での地域再生の可能性



徳水先生は、被災地・過疎地域で地域再生を行うことで生まれる可能性について以下の3つを挙げている。

①住民が主体となって自治の力と協働で地域を作り直していく可能性

地方や田舎には、行政の言いなりになったり、行政に全てを任せきりにしてしまいう人が多い。一方で、行政を過度に避難する人もいる。しかし、そうであってはいけない。徳水先生は、「外側からただ批判するのではなく、内側に入ってみて、一生懸命にがんばっている人たちがいると知れば、その人たちが主体となって、行政と一緒に作り上げていく可能性が生まれる」と話した。

②分散型の経済構造の可能性

ローズファクトリーガーデンのように、食料を作る場所はある。あとは、それを作るエネルギーが必要だ。地域内でお金が回り、食料とエネルギーを自前でつくり出せるようになることで、戦争や災害、パンデミックに強い経済構造が可能なのである。

③地域経済を自主管理する能力と政治的自治能力の獲得の可能性

住民一人ひとりがこのような力を身に付けて賢くなることで、民主的ルールで行政と交渉して要求を実現することができたり、連携したりして、地域再生に共同しながら目指すことができるのである。

徳水先生は、これらの可能性が実現していくことを「おだやかな革命」だと考えている。「みんなが幸せになる、おだやかに社会を変えていく、そういう可能性を秘めているのだらうと思っている」と話してくれた。

○今後の持続可能な町づくりの挑戦

持続可能な地域をつくるためには、持続可能な経済構造の構築が重要な土台となると徳水先生は考えている。そのために、まずは、雄勝花物語の個別の挑戦として、地域課題の解決を目的に「ソーシャルビジネス」を目指している。そして、ガーデンで育てているオリーブの会員制やオーナー制度などを予定しており、財政基盤の確立を目指す。

そして、多くの人たちが雄勝を訪れるきっかけになることを目的とする、雄勝ガーデンパーク事業としては、CSR（企業の社会的責任）やCSV（共有価値の創造）を目指す団体や企業社員の参入を探っている。視察を行った8月時点で、1団体が加入済みである。徳水先生は、「点で活動している人や団体を線で結ぶことで、お食事処や商業施設、レジャーなどの滞在型の体験プログラムとして充実させ、雄勝に集まる人の流れをつくりたい」と夢を話してくれた。



ガーデンのボランティア作業として
ラベンダーの実の摘み作業をさせていただいた

○ローズファクトリーガーデンについての総括

”人とのつながり”が復興からの再生へ導いてくれるのだと学ぶことができた。利枝さんの亡くなった家族や故郷に対する個人的な思いであったものが、千葉大学の方へ、ガーデンの専門家の方へ、地元住民の方へ、ボランティアの方へと、何か徳水先生らが行動を起こすたびにそのつながりが広がっていき、利枝さんの思いは次第に全員にとっての、震災からの復興を目指す大きな願いとなっていった。

そのつながりと願いがあったからこそ、地元住民の方も、雄勝町の復興について大きな希望を抱き、「何かできることをしたい」「みんなが大好きな雄勝町を取り戻したい」と前を向く力になったのだろう。

そして、雄勝花物語の復興プロジェクトが、地域の復興や伝統文化の伝承者となる若者の育成を目指していたように、今日までに雄勝町で生まれたつながりを未来へつなぎ続けることが非常に重要なのだと考える。

教員を目指す私たちがすべきことは、地域との強い連携のもと、地域と共に子どもの成長を支えることだ。その地域の歴史や、地域づくりに関わってきた人々の思いに触れながら、自分の地域を愛すことのできる子どもを育てていきたい。そうすることで、「自分は地域のために〇〇したい」という願いから、地域の未来を当たり前を考える子どもが増え、町の再生とさらなる発展を叶えることができるのではないだろうか。

④雄勝の現状と未来についての総括

2011年3月11日の東日本大震災により、町の8割が壊滅し、人口が4分の1まで激減してしまった石巻市雄勝町。あれから14年の月日が過ぎようとしている今、雄勝の現状はどう変化したのだろうか。

震災後の雄勝町の復興に取り組む徳水博志先生(ローズファクトリーガーデン)と安田健司さん(モリウミアス)が共通して挙げていたのは、「高齢化や子どもたちの減少」であった。

この課題に対して、徳水先生は、「持続可能な町づくりと後継者の育成」が必要だとおっしゃっていた。この実現のために、商業施設やレジャー、宿泊施設など、それぞれ「点」で活動している団体を「線」で結ぶ、滞在型のプログラムを作りたいという目標を語っていた。また、海の食材や現在栽培しているオリーブを活かし、産業の拡大させ、新たな雇用を生み出したいと語ってくださった。今すでに、雄勝にあるものをどう活用し、町づくりに繋げられるか、ということを徳水先生は構想しているようだった。さらに、「失敗はないし、成功するまでやる」という徳水先生の強い意志がとても印象的だった。

安田さんは、雄勝の今後について、「諦めない限り、何かは続く町である」というように話してくださった。この言葉から、安田さんが、「人」そして「雄勝町」を強く信頼しているように感じた。安田さんは、さらに、「続けていれば、協力してくれる人は絶対に現れる」「思いをもってくれている人がいれば、その火が消えることはないのではないか。火の大きさがどうなるかは分からないけれど…」と続けて話してくださった。安田さんが雄勝町に移住して暮らし、日々地域の方々と関わったり、モリウミアスを運営するにあたって、様々な分野の人々とコミュニケーションを取ったりし続ける中で「人とのつながり」を大切にしてきたからこそ、「人」そして「雄勝町」への信頼を感じることができたのではないだろうか。

今回の視察で訪れた、ローズファクトリーガーデンとモリウミアスは、特に被災者の心の復興と、地域の活性化において、雄勝の復興に大きく貢献しただろう。人口の減少が止まらない現状を考えると、震災前の雄勝町と同じような活気を取り戻すことは、まだできていないが、雄勝町は、確実に前へ前へと進んでいると言えるのではないだろうか。

雄勝町には、徳水博志先生と、安田健司さんという、雄勝町の町づくりに対して、熱い思いを持ったお二人がいる。きっとこのお二人の思いに感銘を受け、ともに、雄勝町の未来を守っていききたいという若者が現れるに違いない。

06 ゼミ生の感想

理科コース4年 船山雄太

今回の視察で雄勝を訪れたが、私は今回が初めて津波で大きな被害を受けた地域の視察だった。実際に現場に足を運んでみると改めて津波の怖さを感じることができた。

今回の視察では実際に発災当時現場にいた方から話を聞いたわけだが、その話がなければ本当に津波が来たのか信じられないと感ずることもあった。実際に津波が到達した地点に足を運んだ際にも海は遠くに見える程度か、ほとんど見えない場所も多くあった。そのようなところにまで津波が押し寄せたということに驚いた。また雄勝を襲った津波はその地形の特徴などから奥へ奥へと高く遠く押し寄せたことも聞いた。常識では考えられないような実情や被害があったことを知り、自分の持っている常識にはとらわれない災害への対策が必要だと思った。

また、実際に雄勝のみならず様々な被災地に立って感ずることであるが、今の様子を見る限りではそこに町があったこと、人々の営みがあったことを感ずることができないような場所も多くあった。昔から住んでいた人にとっては大切な人だけではなく、故郷を追い出され思い出なども失ってしまうのだと思った。人々の安全を確保したうえでの復興のためには仕方がないということもあるとは思いますが、人々の気持ちに寄り添った復興について考えていくことが大切だと思った。



未来づくり教育創生コース3年 五十嵐真子

今回の視察を通して、「人と人とがつながることで、人は救われる」ということを感じた。今回の視察では学んだことが多くあった。徳水先生の復興教育では、「分かち合えないことが一番つらい」という言葉が印象に残った。経験していないことを想像して分かってとしても、想像できる範囲に限度はある。しかし、「分かって」という気持ちは、相手にしっかりと伝わり、少しかもしれないが、その気持ちが伝わった相手の心は救われるのだということを感じた。

ローズファクトリーガーデンやモリウミナスについては、取り組みが始まった当初と現在の思いや目指している場所の違いが印象に残った。ローズファクトリーガーデンやモリウミナスは、東日本大震災が大きな転機となり、始まった取り組みだったが、震災から14年が経過しようとしている今、震災による心の傷を抱えた人々だけでなく、震災とは関係がない要因によって生きづらさを感じていたり、日々の生活に何となく疲労を感じていたりするような人たちの心が救われるような場所、誰もが落ち着けるような場所として現在も続いている。この変化を感じ、14年の月日の長さを感じた。その一方で、「多くの人の心の支えとなっている」という点では14年前と変わっておらず、「人は助け合いながら生きている」ということを感じた。

今回の視察・まとめ作業を終えた今、改めて「人と人のつながり」を大切にしたいと思った。



未来づくり教育創生コース 3年 高橋輝良々

今回の視察では、“いのちを守る”ということの責任とその責任のある行動として“正しい選択はあるのか”ということについて考えさせられました。

私は、東日本大震災のとき、そして、被災生活から今日に至るまで、たくさんの方々に支えてもらい、守ってもらいながら生きてきました。「子どもたちのいのちと、子どもたちが守りたいと思った人たちのいのちを必ず守ることのできる教員になりたい」と思ったのも、その方々の存在を近くで感じてきたからです。しかし、今回の視察へ参加し、私は“いのちを守る”ということを少し綺麗に考えすぎていたことに気が付きました。私を守ってくれた方々も、守ってもらうべき立場にあった人たちであり、大切な存在がいたはずです。それでも、震災で犠牲になった方の中には、目の前にあるいのちのために、最後まで諦めずに全員で生きことを信じた人がたくさんいたのだと思うと、本当に胸が苦しくなりました。誰かの“いのちを守る”と決めたとき、必ず何かの犠牲が出てしまうのなら、自分はどのような選択をするのか、未だに考えることができません。

私は、これから教員として子どもたちのいのちを守る立場になりますが、その前に“いのちを守る”という行動の裏側にはたくさんの苦しさがあることを知ることができたのは、とても大きなことだったと思います。いつか本当に災害が起きてしまったとき、子どもたちのいのちを守るために迷いなく子どもたちを導くことができるよう、改めて自分のいのちと自分の周りにあるたくさんの大切ないのちについて向き合っていきたいと感じました。



初等教育専攻 1年 大久保奏亮

雄勝視察は、東日本大震災当時から大学進学まで青森県むつ市や八戸市で過ごしていた自分にとって、人生で初めて見る被災地の視察になりました。

震災から14年が経過した雄勝の街並みは、不自然なほど整然と美しくなっていて、その印象がとても強く残りました。

今回の視察は、東日本大震災を自分事として捉えることができなかった自分が、震災当時の状況を追体験し、具体的に理解を深めることができた貴重な機会でした。将来教員となり、防災教育に取り組みたい自分にとって、この視察はとても意義深いものになりました。特に雄勝小学校の避難行動については、わずかに避難が遅れていたり、状況が少しでも異なったりすれば、多くのいのちが犠牲になった可能性考えると、教員としての災害に関する知識や準備がいかに重要であるかを強く実感しました。

また、比較的災害に対する危機感が薄い青森県で教員を目指している身として、今回の視察で得た学びや教訓を、自分の今後に生かすだけでなく、被災経験のないであろう教員や児童に伝えていきたい思います。これからの311ゼミナールでの活動を通じて、得た知識や考えを自分なりの形にして、防災教育に貢献できるように努めたいと思います。



初等教育専攻 1 年 小山七海

今回の視察を通して、記憶が曖昧だった当時の状況を知ることができ、私たちがどんな状況の中で避難し生き延びたのかを知ることができた。保育所の判断が迅速だったのが常ごろから津波の被害を想定して避難訓練を行っていたことを知り、幼かったため私自身は全然覚えていないが、保育所がおかれた状況を鑑みて、どんな災害が想像されるか、どんな命を脅かす事象が想定されるかを考えて避難のマニュアルを用意していたことを知り、事前の綿密な準備が突然の出来事でもパニックにならず適切な判断を下すためには大切だということを改めて実感した。

また、雄勝の地形の特性上、山の上に行ってもリアス式海岸であるため波が陸地で奥の方が被害が大きくなったことや、保育所が移転を考えていた場所が高台であるのに波が届き、そこに避難していた人が亡くなったという話を聞いて一步間違えれば私も死んでいたかもしれないということを知り、救われたのは最善の選択を保育所の先生方がとってくれたおかげだということを知り、命を救う選択はとても危ういものであり、とても難しいものであるということを知った。また、地形によっては高い場所でも被害を受ける可能性があることを学んだため、住んでいる地域や赴任地の地形がどのようなもので、どんな災害でどんな被害を受けうるのかを事前に知っておく必要があることを学びました。

徳水先生の活動のお話を聞いて、子どもたちに震災に向き合わせる活動をしていることを知り、私は震災から年月が経ってから向き合う活動を行ったが、災害をポジティブに捉えられるようにするために、私自身の経験を生かして、今後、被災した子どもたちが災害と向き合えるように支援できるようになりたいと思った。

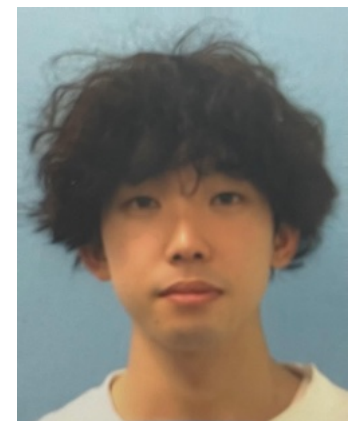


初等教育専攻 1 年 根本蒼唯

私は今回、避難所運営班ながら雄勝視察に同行させていただくことができた。まずはこのような貴重な経験をさせていただいた、武田先生及びに被災地実状班の皆さんへ感謝の気持ちがとても強い。

視察の前準備として雄勝に詳しく調べ、メモにまとめた際に、この地域の悲しい被害について初めて知った。さらに死者数や津波の高さなどの数字と向き合い、自分なりに整理をして視察に向かった。ただ、やはり現地に出向かないとわからないことがたくさんあった。津波最高到達点の看板を見ると、数字から想像する以上の高さがあり、いかに恐ろしい被害がこの町を襲ったのかが想像できた。また、雄勝の方々の心に直接関わることができたことも良い経験になった。徳水先生の魂が込められたお話や、モリウミアスの方々の、復興への強い思い、総合支所の方々の現実的なお話など実際に、会って関わりがないと聞くことができないお話は強く心に残り、とても充実した時間になった。

この視察で学んだことを活かしていくことはもちろん、雄勝の方々の思いを無駄にしないよう、自分の心に留めて、伝え広げていきたいと強く感じた。自分の中で、とても充実した良い視察となった。



初等教育専攻1年 佐藤菜々香

インタビューや視察を通して、東日本大震災を新たな視点で見つめることができた。

今まで、東日本大震災の自分自身の経験やこれからの伝承について考えることが多かった。雄勝地区の被災や震災後の街の様子、友人の被災経験について知ること、自分自身の東日本大震災に対する考え方を見つめなおすことができた。

多くの人が犠牲となった場所に実際に足を運んだり、お話を聞いたり、様々な報道の背景にあったことを調べたりすることで、ただ表面的に事実を見聞きしただけでは考えることのできないようなそれぞれの立場に立った震災等に対する思いを知ることができた。

雄勝保育所の災害対策について聞き、雄勝小学校の当時の避難を追体験したことで、被害の大きさや緊迫した状況であったことを肌で感じる事ができた。地域の特性、雄勝町の場合はリアス海岸であるため、津波が来たら遠い所よりも高い所に避難する、といったことを普段から意識しておくことが重要だと考えることができた。このことは特定の地域に限らず、どの地域にいたとしても知っておくこと、緊急時に迅速に行動するためにつけておくべき知識だと思った。

震災で一度は街のほとんどが海になってしまい、さらに多くの人の命や街並みが奪われてしまった場所が、様々な人の思いが集まることで復興し続けている様子を見ることができた。ここまで復興が進むまでには、全ての人が納得のいく方法でなかったこともあるかもしれない。しかし、過去を受け止め、今、そしてこれからに目を向けて活動されている方々の思いの強さを感じ、だから前に進んでいるのだと感じることができた。

今回の活動で学んだこと・感じたことを活かして、東日本大震災と向き合い続けていきたいと思う。



初等教育専攻1年 千葉雄翔

今回のゼミ活動は、1泊2日で雄勝町について深く学ぶというものでした。この2日間はすべての活動に意味があり、「防災」に長い時間向き合えた有意義な時間でした。石巻市雄勝町は自分の地元と比較的近い場所でありながらも、どのような震災被害を受けたのかは表面上でしか知りませんでした。ですが今回の視察を通して、当時の甚大な被害や復興状況、これからの雄勝町の未来について深く知ることができました。

多くの学びがあった中で印象に残ったものの1つは、徳水先生のお話です。震災当時、学校の教員として子どもたちと一緒に避難をしたという体験談は貴重なもので、将来自分がどのように行動するかの指針のようなものを教えていただきました。また、防災に関連した話から、教員として大切なことも教えていただき、徳水先生の熱く語る姿勢が今でも心に残っています。教員として子どもたちに伝えていかなければならないことは、思った以上にたくさんあるのだと再認識することができました。

311ゼミの活動として、現地に足を運んで、その人からしか聞けない話を聞くということは、防災を学ぶ上で1番に大切にしたいことです。今回も雄勝病院の慰霊碑だったり、防潮堤の壁画だったり、その場所でしか分からない空気間や震災当時の状況が全てではなくとも理解できたと思っています。また、武田先生がいつも言っている、人とお金と時間があれば復興できるという言葉が雄勝町でも実感ができました。



初等教育専攻 1 年 高木那々実

今回の視察では震災当時、小学校で働いていらっしゃった先生のお話を聞くことができたことで、これから教員になった時にどのような行動をするのかなどたくさん考えることのできる有意義な経験になりました。

特に震災が起きたときにどのような行動を行うべきなのかがマニュアルや訓練で準備してきたことだけでは足りないことを改めて実感できたことが今回の視察で一番身になりました。今までは教育委員会や学校が決めたことが重要であると考えていましたが、用意されているマニュアルはあくまで指針であり絶対ではないと感じ、子どもの命が危ない状況になった時に自分が正しい判断をできるのかとても不安に思いました。震災当時は地域の方の声で行動を変えたことで最終的には子どもたちを守ることができましたが、偶然であってももしもマニュアル通りの動きをしていては不可能だったと思います。

今回の視察を通して自分で考えて行動することや普段からの準備が不可欠であると感じ、教員になった時に今回の経験を活かしたいと思いました。震災について学ぶことは自分の記憶と向き合うことになり苦しくなるため今までは避けてきましたが、今回様々なお話を聞くことができて本当に有意義な時間になりました。これからも命を守るためにどのようなことが必要なかを考えていきたいです。



初等教育専攻 1 年 千葉奈々子

初めて視察活動に参加して、津波の被害があった被災地に赴き、慰霊碑に手を合わせるという経験を初めてしたが、モニュメントの先端が津波の最高到達点であることを初めて知ったため、雄勝病院があった場所のさらに上の丘に高く作られたモニュメントを見上げ、当時のことを想像したとき、一番の衝撃を感じた。雄勝町に視察に行くにあたって、事前情報として津波の高さや被害の大きさを調べて視察に臨んでいたけれど、実際の高さを目の前にしたら考えていたより全然違って見えた。自分の足でその地に立って、自分の目で見るのがどのように重要であるかを知ることができた。

震災当時、雄勝保育園の園長さんを務められていた先生のお話は、将来幼稚園教諭を目指しているわたしにとって、とても貴重な体験となった。小さな子どもたちの命を預かっていた保育園が発災時に迅速な行動をとったことで避難に成功したことは、忘れずにいたい。地震が起きたときにすぐに逃げようと、お昼寝をしていた子どもたちにジャンパーを着せ外に飛び出した。2～5歳の子どもたちだった。人より先に行動しなくてはいけないと思ってすぐに行動したという言葉が印象に残っている。本来ならば小学校もそのように行動すべきなのではないかと感じた。小学校の避難についての新たな要点を学ぶことができた。これからも各地の実情を知り、考えることを続けていきたい。



初等教育専攻1年 福岡加彩

今回の視察では当時保育園児だった七海さんの震災の経験から雄勝の震災についてたくさんのことを学び、知り考えることができた。

雄勝小学校や、雄勝保育所といった教育現場の震災当時の話を聞き、教員という立場における被災について知るとともに、実際に自分が教員としてその場にいたらどうするかと、それぞれの場面で「自分だったら」と考えながら雄勝の震災についての話を聞くことができた。

徳水先生が何度もおっしゃっていたマニュアルは役に立たないという内容のお話からマニュアルはすべてではないのだなと思うとともに、マニュアルや日頃からの避難訓練のおかげで避難することができた保育園の事例からマニュアルだけではなく、日頃からの訓練によって震災が起きたときの練習を繰り返しておく経験は実際に震災が起きたときに簡単に体が動く土台になっているのだなと感じた。

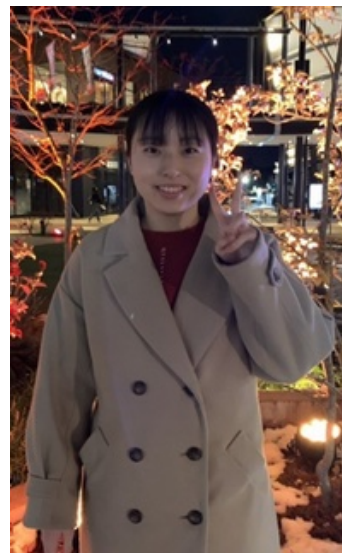
マニュアルもちろん必要だがそれがすべてと考えるのではなく、あらゆる可能性を考えておくことが必要なのだなと思った。マニュアルなどを気にせず子どもたちのいのちを守る最善の行動を行った雄勝小学校の教員の皆さんや保護者の人の声、消防の人の判断など、すべての行動が命を救っており、子どもたちの存在も大きな力になっていたのではないかと感じた。そんな子どもたちをそばで守る教員としてできることを知り、考え、学び続けていきたい。



生活系教育コース(家庭科)1年 築場麻花

今回の2日間に渡る雄勝での視察を通して、当時の被災状況や学校現場の課題、教員を目指す私たちに求められていることなど多くのことについて知ることができた。

徳水先生のお話を聞いて、教員は子ども達の「今」も「未来」も預かるとても責任ある職業であるということを改めて痛感した。被災の瞬間もその後も、教員は沢山の子どもの命や人生を背負いながら物事を決断したり、子どもと向き合い続けたりする必要がある。だからこそ、過去の体験や科学的な根拠などを融合させた意味のあるマニュアル・避難訓練作りや教員同士の情報共有、子ども達の心の中にある感情や願いなどを汲み取ることが出来る教員になれるように努力してこうと強く感じた。また、ガーデン作業やモリウミアスでの体験、雄勝総合支所でのディスカッションを通して、雄勝は沢山の人の力で新たな街へと生まれ変わりつつあること、そして被災後も沢山の人に大切にされているのだと実感した。震災によって失われたものは戻ることはいないけれど、それでも前へ進もうとする多くの方々やその証にも沢山出会い、微力ではあるかもしれないが自分に何が出来るかを考えていきたいと感じた。私は雄勝を訪れることは今回が初めてで、想像していたよりも美しくて穏やかな場所だった。そんな雄勝で約14年前に大震災があったという事実や教訓、そして自分が訪れて得た学びを忘れることなく、これからきちんと向き合い続けていきたい。そして、今を生きている1人として、教員を目指すものとして、次世代へ繋げていきたい。



初等教育専攻 1 年 西美紗緒

私は今回、ゼミに入って初めての視察だった。小山さんのお話等もあり今回は特別な思いを持って臨んだ。

実際に雄勝病院に足を運び犠牲者の慰霊碑を目にした際、小山さんと同じ名字が刻まれているのを見つけ、その瞬間自分の中で震災が遠い出来事ではなく友人やその家族にとって深い悲しみと向き合う現実なのだと強く感じた。病院の近くには津波の高さを示す指標があり、その高さを見上げたとき、想像していた以上の自然の脅威に圧倒された。この高さの津波が実際にここを襲ったのかと、恐怖とともに言葉を失った。震災がどれほど多くの命を奪い生活を一変させたのかと改めて考えさせられた。

それは単なる数字やニュースではなく、今も続くものなのだと気付いた。雄勝小の避難を実際に体験した際、その道のりは険しく、私でも苦労した場所を当時、保育園生までもが避難したという事実を聞いて、その小さな体にどれほどの恐怖がのしかかったのか、想像するだけで胸が締め付けられる思いだった。

さらに、避難場所に向かう途中、津波で流されたとみられる家の中の品物が、未だに幾つも落ちていた。それを目にし、震災がただの過去でなく、今もこの場所に生々しい爪痕を残していることを実感し、津波が本当にここを襲ったのだと頭では理解してはいたのに、その現実が目の前に広がることで言葉にならない思いが込み上げた。

徳水さんの話では、ただ授業を行うだけでなく子供達にとって今本当に必要なことは何かを深く考え、それを授業に反映させていて、その姿勢は私にとって印象的で教育の本質を見つめるきっかけにもなった。特に徳水さんの「目の前の子供に対しての最善を考える」という言葉が心に深く響いた。この言葉は、過酷な状況においても未来を信じて全力を尽くす先生の思いが詰まっているように感じた。同時に自分が教員になった時には、徳水さんのように人の為に全力を尽くす存在でありたいと思った。

道の駅での食事の時、おばあさんが声をかけて下さった。その方は息子さんを亡くされており、私達が震災について学ぶことに対してありがとうと伝えてくださった。その言葉を聞いた時、震災について学び、記憶を伝えていくことがいかに大切なのかを改めて感じた。

この経験はきっと一生忘れることはないと思う。雄勝の海は凄く美しく、息をのむほどだった。その美しい海が、あの日、多くの人々の命を奪った津波を生んだのだと考えると、自然の恐ろしさを痛感せざるを得なかった。同時に人間がいかに無力であるかを改めて感じた。

視察を通じて、私は震災の記憶を風化させないために、自分ができることを考えたいと思う。そして、友達やその家族の思いに寄り添い、震災について学び続けていきたいと思う。

